HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	調査ノート：北海道A町における高齢者一人暮らし世帯の貧困
Author(s)	佐々木, 宏; 福嶋, 恒平; 橋本, 護; 波多野, 貴之; 伊藤, 章江; 川村, 麻利子; 菅, 洋一; 佐々木, 仁美; 佐々木, 奈央; 山岸, 加奈
Citation	教育福祉研究, 11, 29-42
Issue Date	2005-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/28382
Type	bulletin (article)
File Information	11_P29-42.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

[Journal of Education and Social Work No.11 2005
教育福祉研究　第11号　2005]

調査ノート：北海道A町における高齢者一人暮らし世帯の貧困

佐々木　宏・福嶋恒平・橋本　護・波多野貴之
伊藤章江・川村麻利子・菅　洋一・佐々木仁美
佐々木奈央・山岸加奈

はじめに

これは、平成16年度の北海道大学教育学部の授業「社会福祉調査実習」において行われた社会調査『北海道A町における高齢者一人暮らし世帯の調査―その生活課題を明らかにする』の結果を使った論考である[1)]。調査は、平成15年度に北海道K町で実施したものと同様、「貧困の世代的再生産」という視点を据え、高齢者の現在の生活、現在までの生活の軌跡、そして子ども世代の生活、を聞き取ったものである。

この小論では、昨年度の調査の「報告」にあたる「調査ノート：高齢者一人暮らし世帯の貧困―貧困の世代的再生産の視点」[青木ほか2004]にならい、A町での調査結果の概要を報告する。結果を整理報告するにあたっての問題意識、前提となる現在の高齢者世帯の現状、さらにこの調査のデータ上の制約などについては既に青木らの稿で述べられているので省略するが、問題意識だけは簡単に繰り返しておく。

昨年度のK町調査の前までは、主に困窮を余儀なくされている母子世帯の調査を進めていたがそこで注目された事実は、生活に困窮している母子世帯の親の世代もまた多くが余裕のない生活を送っているということであった。このことを受けて、次に親世代の生活と親世代から聞き取った子ども世代の生活の状況を明らかにすることをねらい企画実施されたのがK町調査であり、また以下報告をするA町における一人暮らし高齢者の聞き取り調査である。

1．A町の一人暮らし高齢者世帯の生活

昨年度の「報告」では、K町で調査にご協力いただいた高齢者の方の生活を、内閣府の調査結果から分かる現在の日本社会における一人暮らし高齢者の生活一般との比較を通じて位置づける作業が行われている。ここでも、その内閣府調査のデータを念頭におきつつA町調査の25人の一人暮らし高齢者の生活をみてゆきたい。調査にご協力いただいた25世帯の概要は、二つの表(表1と表2)にまとめた。

まず、表1からみてゆくと、聞き取り対象者は、男性が7人、女性が18人であった。一人暮らしになったきっかけは、配偶者の死亡が最も多く（事例3も含めれば19世帯)、そのほかに離婚が3世帯、子どもが結婚のため親元を離れることにより一人暮らしになったものが2世帯であった。この結果は、内閣府調査が示す全国的な動向に概ね合致している。高齢者世帯の経済的な生活を大きく規定していると思われる年金の状況を確認しておくと、4世帯を除き、大半の世帯が国民年金、厚生年金、共済年金などの年金を受給している。また、女性の場合、亡くなった夫の遺族年金を受給している世帯も多い。さらに、年金については、受給額がそう大きくない世帯もあり、無年金世帯はもちろんのこと、そのような世帯の収入は生活保護で不足分が補填されていた。回答のなかった3世帯を除く22世帯から「聞き取られた」概算年収は、50-100万円(10世帯)、100-150万円(3世帯)、150-200万円(3世帯)、200-250万円(4世帯)、250-300万円(2世帯)であった。この分布

からは、まず、今回の調査対象世帯は低所得世帯が大半を占めているといえ、K町調査と同様、A町での調査からも経済的に「楽ではない」一人暮らし高齢者の現実を確認することができた。その「楽ではない」暮らしについて、年収額が最も低いグループに属する2事例から聞き取られた「語り」を紹介しておく[2)]。

・「毎月（余分なお金が）でないんだよね。パーマかけたり、ズボン買ったりね。予定外のね。ギリギリなんだもん。○○（隣の自治体）なら（月額の保護費が）14万くらいもらってる。ここは3万しかもらっていない。大事に使っている。6万は完全にかかる。テレビ代、ガス、灯油とかね。新聞は夕刊しかとっていないけど。お寺参り、お彼岸とかね。やりくりね。（保護を受けて）10年経つけど毎月だ。」事例8　女性　66歳

・「（年金が）二ヶ月で13万円くらいだなぁ。なんも買えない。ほんとに。家賃と電気、水道払うけどほんと足りない。これからまた灯油かかるしょ。下手すりゃ赤字の時もある。ゆるくないよ。ゆるくない。こういうの（灯油代など）出すの自分持ちだから。毎月ね、1万なんぼかかる時ある。ゆるくない。ほんとに」事例11　女性　80歳

一方で、A町での調査対象世帯は、昨年度のK町調査の対象世帯が50-100万円、100-150万円というきわめて低い収入グループに集中していたことと比較すれば、上のような高齢者世帯を含みつつ、やや「豊かな」（あくまでも相対的な意味ではあるが）高齢者世帯も含んでいるといえる。この点については、事例20のように公的年金に加え私的年金を受けている世帯、また、所有する家屋を人に貸して家賃収入を得ている世帯（必ずしも「聞き取られた」収入額には反映していないが事例15と19。表3参照）があったという事実からもうかがえた。

次に表2をみてゆくと、健康については半数以上の世帯から「健康」であるという回答が得られた。一人暮らし自体が健康であることによって成立することからある意味当然のことではあるが、「多少問題がある」と回答した世帯も含めて、定期的な通院はしているものの、概ね一人暮らしが可能な程度の状況にある者が大半であるといえる。とはいえ、重い心臓病、肝臓病、糖尿病を抱えていた事例1、具体的な診断名は不明であるが身体のしんどさを聞き取り中ずっと訴えていた事例2、また過去の仕事との関連が疑われる（本人談）原因不明の関節痛や心臓病・肝臓病を抱えている事例4など、いわば「満身創痍」の状態で一人暮らしをしている世帯もあった。なお、「生命保険をかけているか否か」については、12世帯が「かけていない」という回答であったが、一方で「以前かけていた」「かけている」という回答が9世帯から得られている。K町調査では、11世帯すべてが生命保険をかけておらず、「報告」ではこの事実を高齢者という年齢的な条件と関連させて解釈している。保険加入についてのA町調査の結果は、高齢であっても保険に加入している世帯があることを示している。K町調査の結果と同様に、150万以下の年収の世帯についていえば、K町調査の結果と同様ほとんどが保険をかけていなかったので、高齢であるということよりむしろ一定程度の所得があるか否かの方が保険加入については重要であると考えた方がよいのかもしれない。ただ、保険の種類や性格についての詳細まで聞き取っているわけではないので、保険加入の有無は、リスクへの備えに違いがあると考えることはできても、そのまま資産の有無として評価することはできない。

次に表2にある住宅についてみてゆくと「持ち家」が14世帯、公営住宅と民間賃貸住宅が11世帯であり、「持ち家」が例外的であったK町調査と対照的な結果となった。住宅についても、保険の加入状況と同様、年収150万円以下とそれ以上で二分化されているのが特徴的であった。K町調査の「報告」では、住環境の質の低さについての指摘があったが、「持ち家」の多いA町の調査世帯からはこの点についての不満や問題点などは多くな

表1　調査世帯の概況（1）

事例番号	現在の年齢	性別	一人暮らしになった要因	現在のおよその年収	生活保護受給の有無	年金の種類と有無	仕事の有無
1	66	女性	離婚	50－100万円	受給している	なし	していない
2	83	男性	離婚	50－100万円	受給している	なし	していない
3	92	女性	内縁の夫の死亡	50－100万円	受給している	国民年金	していない
4	63	男性	離婚	50－100万円	受給している	なし	していない
5	76	男性		50－100万円	受給している	なし	していない
6	82	女性	夫の死亡	100万円前後	受給している	国民年金・遺族年金	していない
7	81	男性	同居していた娘の結婚	50－100万円	受給している	国民年金	していない
8	66	女性	夫の死亡		受給している	厚生年金	していない
9	78	女性	夫の死亡		していない	国民年金	していない
10	75	女性	夫の死亡	200－250万円	していない	国民年金・遺族(厚生)	していない
11	80	女性	夫の死亡	50－100万円	していない	遺族(厚生)年金	していない
12	79	女性	夫の死亡	100－150万円	していない	遺族(共済)年金	していない
13	76	男性	妻の死亡	200－250万円	していない	厚生年金	していない
14	71	女性	夫の死亡		していない	厚生年金	していない
15	81	女性	夫の死亡	100－150万円	していない	国民年金	していない
16	79	女性	夫の死亡	200－250万円	していない	遺族(厚生・共済)年金	していない
17	76	女性	夫の死亡	150－200万円	していない	国民年金・遺族(共済)	していない
18	89	男性	妻の死亡	50－100万円	していない	国民年金	していない
19	80	女性	夫の死亡	50－100万円	していない	厚生年金・遺族年金	していない
20	74	女性	夫の死亡	約300万円	していない	国民・遺族(共済)，個人	していない
21	69	女性	夫の死亡	200－250万円	していない	国民年金・遺族年金	していない
22	77	女性	夫の死亡	100－150万円	していない	遺族(共済)年金	していない
23	68	女性	同居していた息子の結婚	150－200万円	していない	厚生年金・遺族(共済)	していない
24	74	女性	夫の死亡	150－200万円	していない	厚生年金	していない
25	78	男性	妻の死亡	250－300万円	していない	共済年金	していない

表2　調査世帯の概況（2）

事例番号	健康状況	定期通院	生命保険の有無	住居の現状	近所づきあい	ちょっとした事を頼むことができる人	除雪の状況
1	問題多い	している	かけていない	公営住宅	ほとんどない	ヘルパー・ケアマネ・看護師	役場
2	問題多い	している	かけていない	公営住宅	あまりない	いない	自分で
3		している		公営住宅	よくある	隣人	
4	問題多い	している	かけていない	公営住宅	ほとんどない	いる	大抵自分で
5	健　康	していない	かけていない	民間借家	よくある	近所の人	
6	多少問題	している	かけていない	公営住宅	ほとんどない	いない	自分で
7	多少問題	している	かけていない	公営住宅	よくある	いない	自分で
8	健　康			公営住宅	よくある	近所の人（議員）	大抵自分で
9	多少問題	している	かけていない	持ち家	ほとんどない	近所の人	自分で
10		している	かけている	持ち家	よくある	近所の人	自分で
11	多少問題	している	かけていない	公営住宅	あまりない	近所の人	自分で
12	多少問題	している	以前かけていた	持ち家	よくある	近所の人	役場
13	健　康	していない	かけている	公営住宅	ほとんどない	いない	自分で
14	健　康	していない	かけていない	公営住宅	よくある	いない	自分で
15	多少問題	していない	かけていない	持ち家	よくある	いない	大抵自分で
16	健　康	している	かけていない	持ち家	よくある	近所の人	役場
17	多少問題	している	以前かけていた	持ち家	よくある	いる	
18	健　康	している	かけていない	息子の持ち家	ほとんどない	息子	隣家の嫁
19	健　康	している	かけている	持ち家	よくある	いない	大抵自分で
20	多少問題	している	かけている	持ち家	あまりない	いない	自分で
21	多少問題	している		持ち家	よくある	近所の人	近所の人
22	健　康	している	かけている	持ち家	よくある	近所の人	大抵自分で
23	多少問題	している	かけている	持ち家	よくある	いる	大抵自分で
24	健　康	していない	かけている	持ち家	よくある	いる	自分・隣人
25	多少問題	している	かけている	持ち家	よくある	甥・昔の職場の仲間	シルバー人材センター

かった。さらに、公営住宅を利用する世帯からも不満はあまり語られていない。これはK町と異なりA町では公営住宅の建て替え（他の場所での新築）が今まさに進んでいるということが一つの理由として考えられる。しかし、筆者自身が訪問し聞き取りをした事例に関してだけからではあるが、「聞き取られていない」問題点がなかったとはいえない。「住宅について何か問題はありますか？」という問いに対して公営住宅に住む事例4の方は、以下のように語っている。

・「なし。雨漏りしても、言えばすぐ直してくれる。冬もそんなに寒くない。一人では大きすぎるくらい（筆者注：3部屋・風呂トイレ有）」事例4　男性　63歳

他の「持ち家」世帯の状況をふまえて訪問時の印象をいえば、すぐに直してくれるかどうかは別にしても日常的に雨漏りがあってもおかしくはないほど内外装ともに老朽化した平屋住宅であったし、集中暖房システムを備えていることもある「持ち家」世帯と比較すると一つしかない灯油ストーブに頼る冬の生活が「そんなに寒くない」といえるのかどうか疑問を感じた。少なくとも事例4の世帯に関していえば、相対的にも住環境が貧しいというのはもちろんのこと、健康で文化的な最低限の条件が確保されているとは言いがたい状況であった。

2．生活の軌跡のなかでの有利・不利の形成

さきほど、A町調査の対象となった25の一人暮らし高齢者世帯の生活基盤にある一定の格差がみられることを確認した。たとえば、高齢者の経済生活の根幹である年金についての差異ほか、収入に関する条件の違い、リスクへの備えとしての保険の加入状況、また生活の基礎となる居住条件の違いなどである。これらの生活の条件について、それぞれの高齢者が主観的な次元でどのように認識しているかは別であるが、客観的に判断すれば、収入の多寡、健康であるかそうでないか、また住環境に恵まれているか否かなどは、一人の人間の生活を規定する有利（Advantage）・不利（Disadvantage）であるといえる。昨年度の「報告」でもそうであったように、ここではこれらの有利・不利が、高齢者の出生から現在に至るまでの生活史のなかで「累積的に」形成されてきたのではないか、という視点から、表3にまとめた25世帯の生活の軌跡を眺めてみたい[3)]。

むろん、表3は断片的なものであるが、それでもいくつかの特徴がうかがえる。学卒後リタイアに至るまで、どのような職業に就いていたか、あるいはどのような勤務形態であったのか、ということはわが国の場合、年金の有無・種別・給付水準に大きな影響を与える。その意味で、過去の就業状態は、25世帯の現在の経済的な有利・不利を決める決定的な要素となると思われるが、調査結果はこのことを裏づけていた。現在、生活保護で収入を補塡している無年金世帯や年金額の少ない世帯（事例1～8）においては、過去、不安定な仕事を転々としている事例が多く見受けられる。それとは対照的に生活保護を受けていない世帯においては、国鉄(JR)、農協、地方自治体、郵便局など安定した職場にリタイアまで勤めていた事例が多くあった。また、女性の場合は、夫の就業状態、夫との関係が現在の生活の条件が関わっている。たとえば、事例1の女性は、過去様々な職業に就いているが、自らの職に基礎をおく年金を持っておらず、また離婚をしたため夫に関わる年金を受けてもいない。対して結婚後ずっと専業主婦であった女性でも、夫が定年まで安定した職を勤め上げている事例（10、16、20、21、22、23）をみると、夫の職歴に依拠する年金を受けている。

過去の就業状態と高齢期の経済生活との間に何某かの関連性があるということについては、年金制度のあり方を前提にすれば当然のことであるともいえるが、有利・不利の「累積的」形成という視点にこだわるとすれば、過去の就業のあり方そのものにも有利・不利があり、また、学歴形成や学卒後の職業選択、キャリア形成にも有利・不利があったと想定することになる。この点について就業状態に関してだけいえば、老後の経済生活の

表3　出生から現在に至るまでの生活の軌跡

	事例番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9
現況	年齢	66歳	83歳	92歳	63歳	76歳	82歳	81歳	66歳	78歳
	性別	女性	男性	女性	男性	男性	女性	男性	女性	女性
	年収	50－100万円	50－100万円	50－100万円	50－100万円	50－100万円	100万円前後	50－100万円	不明	不明
	生活保護	受給	受給	受給	受給	受給	受給	受給	受給	受けていない
	持ち家	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	なし	有
生活の軌跡	育った場所	空知の山の中	樺太	鹿追	豊頃	秋田県	函館	樺太	青森県	青森県
	親の職業	林業	大工の棟梁	農家	大農家	商家	定職なし(養父)	林業	農家	漁師
	最終学歴	旧制小学校	旧制小学校高等科	旧制小学校3年くらいまで	中学校	師範学校中退	旧制小学校	旧制小学校高等科	高校中退	旧制小学校高等科・看護学校
	結婚までの職業	不明	海軍→（運輸関連の）同業者組合	不明	製材→重機運転	炭鉱→料理人→日雇い	風呂屋で奉公→徴用工（戦中）→ウエイトレス	炭鉱→兵隊	旅館のまかない	警察署の雑用→看護学校→療養所勤務
	結婚式	しなかった	した	した	しなかった	した	しなかった	しなかった	しなかった	した
	結婚相手の職業	炭鉱の小間使い（結婚時、その後は不明）	不明	農業→豆売り、土木作業、農家の手伝い等	専業主婦	不明	船の機関士→工場経営	専業主婦	菓子職人→不明	畜産業
	結婚後の自分の職業	すし屋、飲み屋の店員、スーパー店員などいろいろ。	同業組合→闇市→炭鉱→土建屋→麻雀ゴロ→家電製造工場	農業→運輸会社勤務	重機運転→廃棄物処理（自営）	山林関係の日雇い労働	自営の工場を手伝う	酒屋・職業訓練学校の指導員→自営業（詳細不明？）	農家の手伝い、清掃パートなど	畜産の手伝い
	結婚後の地域移動	赤平→帯広→A町	稚内→歌志内→釧路・札幌・帯広→愛知県→A町	鹿追→帯広→陸別→帯広……A町	帯広……A町	大樹→A町	函館……釧路→A町	ずっとA町	浦幌→池田→A町	ずっとA町
	子育てについての特記事項	長男、次男が障害を持っていた	30歳代で子どもをおいて家を出たので詳しいことは分からない	長男が電車に足を轢かれ義足になった			夫の姉の娘を「養女」のように育てていたが、19歳の時に家出した		子どもが教護院に入所した。	
備考		A町に来たのは二人目の夫から離れるため。		最初の夫とは死別し、その後内縁の夫と暮らす。一人暮らしになったのは内縁の夫が死亡したため	親の財産は、トラブルがあってまったく相続していない。		工場経営は最後には悪化し、夫の死亡後、工場をたたんだ時、借金だけが残った。			

注）職業と地域移動について。「→」は、職業変遷や地域移動が連続しているもの。「……」は、間にある職業や地域が不明なもの。

	事例番号	10	11	12	13	14	15	16	17	18
現況	年齢	75歳	80歳	79歳	76歳	71歳	81歳	79歳	76歳	89歳
	性別	女性	女性	女性	男性	女性	女性	女性	女性	男性
	年収	200－250万円	50－100万円	100－150万円	200－250万円	不明	100－150万円	200－250万円	150－200万円	50－100万円
	生活保護	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない
	持ち家	有	なし	有	なし	なし	有	有	有	有
生活の軌跡	育った場所	池田	浦幌	福島県	忠類	十勝清水	帯広	池田	帯広	三重県→北海道
	親の職業	農家	農家	鍛冶屋	郵便局勤務	炭鉱夫	弁護士の手伝い	豆腐屋	農家	農家、炭焼き
	最終学歴	旧制小学校高等科	旧制小学校	女学校	旧制小学校高等科	中学校	旧制小学校（その後、洋裁学校）	不明	女学校（その後、裁縫の専門学校）	不明
	結婚までの職業	家（農業）の手伝い	他農家での奉公	信用金庫勤務	製材会社勤務	缶詰工場勤務	家事手伝いをしながら洋裁の下請けをしていた	忠類に奉公に出た	和裁の仕事	子守→炭焼き→農家→大工
	結婚式	した	した	した	しなかった	した	不明	した	した	した
	結婚相手の職業	国鉄勤務	農業（土木作業の仕事にも出ていた）	国鉄勤務	結婚後、寮のまかない	林業→ベニヤ工場勤務	自営業：自転車屋と新聞屋	国鉄勤務	国鉄勤務	不明
	結婚後の自分の職業	専業主婦（パートに出たこともある）	農業→農協の豆選びの仕事	化粧品販売の代理店を経営	製材会社勤務（結婚の時に一度辞めた会社に戻った）	専業主婦（時々、農家の手伝いなど）	自転車屋の手伝い	専業主婦（時々、農家の手伝いなど）	和裁の仕事	大工
	結婚後の地域移動	釧路→駒場→十勝三又→布部→芽室→中札内→勇足→A町	ずっとA町	池田→A町	帯広→A町	清水→A町	ずっとA町	池田→A町	池田→A町	北海道の入植地（場所不明）→大樹→A町
	子育てについての特記事項	夫の転勤が多く、子どもに友達ができない、勉強についていけないなど苦労をかけたと思っている				長女が高校生の時に結核で入院した。		長男が小児マヒだった		
備考							自宅の他に家を所有しており、人に賃貸している。			

	事例番号	19	20	21	22	23	24	25
現況	年齢	80歳	74歳	69歳	77歳	68歳	74歳	78歳
	性別	女性	女性	女性	女性	女性	女性	男性
	年収	50－100万円	約300万円	200－250万円	100－150万円	150－200万円	150－200万円	250－300万円
	生活保護	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない	受けていない
	持ち家	有	有	有	有	有	有	有
生活の軌跡	育った場所	池田	芽室→士幌→美幌	豊頃	浜頓別	足寄	新得	新得→A町
	親の職業	不明	公務員	不明	国鉄勤務	農家	農家	農家
	最終学歴	旧制小学校高等科	女学校	不明	旧制高等学校	中学校	旧制小学校高等科	旧制小学校高等科
	結婚までの職業	工場勤務	道庁支所勤務→運輸会社勤務	札幌のホテル勤務	徴用工（戦中）→国鉄の事務員	家（農業）の手伝い	家（農業）の手伝い	海軍→復員援護局→農協勤務
	結婚式	した	した	した	した	した	した	した
	結婚相手の職業	不明→(結婚後)農協勤務	公務員	公務員	農協勤務	農協勤務	郵便局勤務	専業主婦
	結婚後の自分の職業	町民会館で掃除婦をしていた	専業主婦	専業主婦	専業主婦	専業主婦（パートに出たこともある）	専業主婦→（子どもが中学の頃から）ブロック工場勤務	農協勤務→（定年後）建設会社幹部→農業関連企業幹部→競走馬関連の協会幹部
	結婚後の地域移動	ずっとA町	池田→帯広→本別→釧路→広尾→釧路→A町	豊頃→浦幌→A町	ずっとA町	ずっとA町	ずっとA町	ずっとA町
	子育てについての特記事項		転勤が多く、子どもに苦労をかけたと思っている。					
備考		自宅が大きく、部屋を下宿人に貸していた。						

有利・不利が、安定した仕事（つまり過去の生活においても有利であった条件）と不安定な仕事（過去の生活においても不利であった条件）が連なっていると表3から指摘しても、言い過ぎではあるまい。しかし、その過去の就業状態に深く関わるそれ以前の条件にまで遡って、あるいは就業状態と現在の年金との関連以外のことについて、同様のことが言えるのかといえば、「今回の調査結果を使って」という制約の下では不可能である。ただし、不完全な生活史聞き取りであること、また極めて少数の事例でしかない、という留保を付けざるを得ないが、不利が不利を呼ぶ、つまり現在に至るまでの累積的な不利の形成のあり方を示していると考えられるいくつかの事例はあった。以下の事例は、調査員が聞き取った生活のエピソードをその方の人生にそって整理したものである。

・「（育った場所は）空知の山の中。熊でるとこ。寝る時に（熊が）入ってきたんだ。わら小屋だったさ」「上の子（本人の兄弟）、3人、4人は生まれてすぐ死んだ」「父親が入院していたから、中学校行ってねぇ。小学校も行ったか行かないか分かんない」「父親が死んでさ。医者の家に奉公に来ないかい？　って言われて母に言ったら『ダメだ』『嫁に行っちゃえ』って言ったの。」「（一人目の夫は）酒も煙草もやらん」「（結婚は）5月のお祭りをかねて身内だけで、飲んべの友達の家で祝った」「家みつかるまでは○○さんちの4畳半借りて、その後、炭鉱のハーモニカ長屋。何もない。テーブルの代わりにりんご入れる木の箱もらったの」「（二人目の夫は）アル中でないべか。酔っ払って暴力。（夫の）兄弟からもいじめられた。健康手帳や印鑑は（夫の）弟が持っていた。13年間一緒に酔っ払って職場に来る。（それが原因で）スーパーの人たちにいじめられる。やめないでいたら仕事仕事（たくさん押し付けられた）」「（二人目の夫と離婚して）気楽だった。解放された」「私は流れ者さ。スーパーで働いている。すし屋もあるし、飲み屋もいった。蝶にならずに蛾になった。このころは寝る時間3時間だったもん。楽な仕事ひとつもないわ。色々やったけど、飲み屋だけはやるもんでない」：事例1　女性　66歳

・「生まれ育ちは函館」「父は本人が3歳の時に死亡。母が再婚する時に自分と姉は母の兄夫婦に預けられた。その後、実の親のもとで暮らしたことがない。」「養父はいやだった。女を金で売買していた。花札で博打ばかりしていた。定職についていないので生活は不安定だった。ただ、自分のことはかわいがってはくれた。家にはもらわれた子がもう一人いた。」「女学校に受かったが、伯父は定職がなく、授業料を納められないのと、伯母の再婚相手の息子が奉公にだされて、養子の自分が学校に通うのは引け目があった。」「13歳から19歳までは風呂屋で奉公をした。ここでは大事にしてくれたと思っている。」「19歳から徴用されて缶詰工場で働いた。重労働だった。」「22歳から2年間は、室蘭でウェイトレスをした」「その後、函館に戻って、見合いのような形で一度あった男性に対して養父母が自分ことを連れて行ってくれと言って、二人で何もないところをただずっと歩いていった。それが今の夫。」「夫は青函連絡船に乗っていた。結婚後、函館に戻った。夫は長男だったし、農家もやりたかったので家を継ぎたかったが、弟がすでに継いでしまっていたので、多少嫌そうだったが、釧路の親戚をたよってそこのお店を手伝った。もやしの製造もやっていたので手伝った。」「（15年ほど後に）仕事をおぼえたので自分たちでやり始めた。経営の出だしは好調、競争相手が出来たほど。昔は手作業なので従業員も雇った。」「（当時）夫の姉の娘も育てていた。自分と16歳しか違わない。関係は母子のようだが、あまり良くなかった。」「工場の経営は、機械を入れた他の会社におされるようになり、この頃、結核にかかって2年寝たきりになった。夫は網走の会社に出稼ぎに出たが、（その会社の）経営がへたくそなため、給料を支払ってもらえず、仕送りをしてくれなかった。」「釧路で

の家は、借家で土地などは持っていなかった。」「(夫は)カッとなると見境なく暴力をふるった。酒に酔っているわけでもない。鉄瓶や角材で頭殴られて病院で針縫いしたことも。人が見ていてもお構いなし。そろばんで殴られた。よく愛人をつくって家に戻ってこなかった。浮気はしょっちゅう。しかし、何か言うと暴力をふるわれるのでずっと何も言わなかった」
「夫は癌にかかり、15年やった、もやし工場をやめた。」「保険金は夫の入院で使いきった。」「一年の看病の後、死んだ。貯金はないし、どうしようかと混乱した。」「(当時)夫の兄弟に借りた借金があった。」「夫の兄弟たちが『姉ちゃん一人じゃあかんから俺らのところに来い』と言ってくれてA町に来た。」　事例6　女性

・「(育った場所は)豊頃。姉が二人」「父は村の名士。土地も山もいっぱいあったけれど、後妻をもらって、(本人が中学生の時、父が病に)倒れて、親族会議でもめたけど、どうなったか分からない。相続はまだ若いからだめだって言われた。中一なんて相手にしてくれない。おじさんが後継者になって残ったものは何もなかった。おじさんはこわかった。今と違って何か言ったらすぐ殴られるから。」「(重機の運転をしていた20歳の頃)若い頃は、羽振りが良くて、人も女もたくさん寄ってきた」「(結婚相手は)飲み屋で知り合った」「結婚生活は5年くらい。重機の会社がつぶれておかしくなった。(離婚の)理由は分かりません。俺が悪かった。酒を飲んだくれて、女つくったりした。けんかはしない。俺が家に帰らなくなった。(当時)同棲していた女とは再婚しようと思わなかった。(その後)妻とは一度も会っていない。」「(離婚後始めた)産業廃棄物処理の仕事を長くしていて、そのころはダイオキシンとかうるさくなくて、その後、後遺症がある。左腕の骨が出てきて関節も悪い。(昔の仕事の)仲間がおかしくなって歩けなくなるのを見て、(後遺症であることに)気づいた。指の関節が細くなったりもする」「(産業廃棄物処理の仕事は)トラックに乗って細々とやっていたけど、どうにもならなくなって(A町在住の姉に)町営住宅を申し込んでやるからといわれて(A町に来た)。」事例4　男性　63歳

おそらく当時の生活水準と比してもかなり貧しかったと思われる事例1や定職をもたない伯父に育てられた事例6では、家庭の貧しさや生活の不安定さが就学や進学の障害となっていたようだ。今、生活保護を受けていない事例の「子ども時代」も、当時の時代的状況を反映して現代の水準からみれば恵まれているとは言いがたい。しかし、聞き取られた各事例の「子ども時代」のなかには、女学校や旧制小学校卒業後に通った「裁縫学校」などが散見される。そして結婚するまでの職業生活にもこれらの学校歴はそれなりに連なっているように思われる。

また、事例にあげた二人の女性は、親や養父が選んだ男性と結婚し、それが生活上の困難の一部となっていた。親が選んだ夫であったということは、この点についても生まれた家の不利に関わっていたと考えられるのではないか。つまり、親が選んだ結婚相手に起因する彼女たちの生活の不利は、そのような相手を娘に紹介するネットワークしか持たなかったという生家の状況(不利)に連なっているということである。一般的には、彼女たちが結婚し子育てをしていた当時は今以上に、「誰と結婚するか」ということが女性の一生に大きな影響を持っていたと考えられるが、比較的安定した就業状態にあった男性(多くは親が選んだ相手である)と結婚し、専業主婦を続け老後を迎えた女性と比較すれば、その不利はさらに明瞭になる。

事例4については、比較的「豊かな」家に生まれ育ったとしても、様々な意味合いでの「遺産」を相続しないで一人社会に出ていくことの困難を示している。比較的豊かな家に生まれ育っていたと思われる事例5の人生の軌跡も、若い時期に故あって生家との縁が断たれ一人で世渡りをしてきたという点で事例4の男性の生活の軌跡に近似していた。これらの事例は、家族の持つ有利を受け

継ぐことの重要性を示していると同時に、はじめから子どもに相続させる「遺産」を持ち得ない家族で生まれ育つことの不利を想起させる。さらに事例4は、就業状態における不利が老後の健康面での不利に連なっていることを示している。

3．子どもたちの生活と交流状況

ここまで高齢者の生活の軌跡のなかにある「子ども時代」に始まる有利・不利の形成の流れをみてきた。これは高齢者の親世代の有利・不利が世代的に継承されていると言い換えることもできる。であれば、高齢者の子どもたちの現在の生活はどうであろうか。「貧困の世代的再生産」という視点からは、必然的にこのような問いを立てることになる。もちろん、さきほど高齢者の生活の軌跡から指摘したことをA町調査の結果から「実証した」などとはいえないし、子ども世代と調査対象となった親世代の生活の関連性についても同様である。ここでは研究の視点を試すという程度の目的で、25世帯の高齢者の子どもたちの現況についてながめてみたい。子どもたち世代の現況をまとめたものを表4としてあげた。

それぞれの世帯の子どもたちの生活はもちろん多様なものであったが、表4にある子ども世代の現況は二つの特徴を示している。まずは、比較的「豊かな」老後生活を過ごしている親たちの子どもは、そうではない（さしあたり生活保護を受けていることが指標となるか）親たちの子どもと比較して、安定した職を得て安定した生活を送っていると思われる事例が多いということである。また、子ども世代の学歴にも違いがみられる。たとえば、大学、短大、専門学校を卒業している者は、生活保護を受けている高齢者の子どものなかで一人しかいない。全体的にみても生活保護を受けている高齢者の子どもは、生活保護を受けていない高齢者の子どもと比較し、獲得した学歴の水準が低い。

次に、親世代との交流も生活保護を受けていない事例の方が相対的に盛んであった。表にはあげていないがここでいう交流には世代間のさまざまレベルでの「助け合い」も含まれている。そして、生活保護を受けている世帯のなかには、ただ交流がないのではなく、子どもが結婚しているのか否か、また今何をしているのかが分からないという関係性も見受けられる。

以上のことからは、まず、少なくとも、親世代の生活条件を背負って人生を始めた子どもたちが、その影響を全く受けていないとはいえない。また、親世代の不利を受け継ぐということ（親からは不利を受け継がせるということ）は、世代間の「助け合い」が可能かどうか、つまり現在のお互いの生活の有利・不利に関わるいわば親族ネットワークの力の強弱にも関連してくるようだ。A町調査の結果は、少なくとも、それぞれの家族の有利・不利が世代を超えて継承されているということを完全に否定するようなものではなかったといっても言い過ぎではないだろう。

おわりに

A町調査は、K町調査よりも事例数が多く、さらにK町調査には含まれていなかった相対的に「豊かな」老後を送っている事例を含んでいた。したがって、「貧困の世代的再生産」の視点を試すにあたっては、K町調査よりも適切な素材であったといえる。その結果、高齢者の生活の軌跡のなかにある出生から現在に至るまでの有利・不利の連鎖、また、親世代から子ども世代へのその継承の一端を確認することはできたように思う。これが、冒頭で示した問題意識に関わるこの小論における一応の「結論」である。

最後に、「蛇足」気味ではあることを承知の上で、A町調査の結果を整理するなかで、今後の調査研究に関わる課題がみえてきたことを簡単に述べておきたい。それは、視点としてあげた「貧困の世代的再生産」の含意についてである。この小論ではK町調査の「報告」とは異なり、表題をのぞけば「貧困」という言葉を使っていない。というのは「貧困の世代的再生産」の視点における「貧困」の意味合いが、一般的な貧困研究で使われる「貧困」とは違うことは間違いないのだが、視点の中に含まれる「貧困」とは何かがはっきりしなかっ

表4　息子・娘たちの生活状況

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
第1子	続柄(年齢)	長男（48）	長男（60）	長男（75）		長男（45）	「養女」（？）	長女（52）	長男（36）	長男（55）	長女（50）	長男（54）	長女（48）
	既婚・未婚	未婚	既婚	既婚		既婚	分からない	既婚	離婚	既婚	既婚	既婚	既婚
	家族構成		分からない			夫婦・子2	分からない	夫婦・子3			夫婦・舅姑		夫婦・子2
	学歴	中学校卒	高校卒	高校卒		高校卒	中学校卒	中学校卒	中学校卒	大学卒	高校卒	中学校卒	短大卒
	職業	携帯部品組み立て	分からない	本人：靴修繕、妻：無職		室内装飾	分からない	夫：ベニヤ工場、本人：パート	働いている（仮出所中）		夫：会社員・自動車関連	鉄工所	夫：JR退職後市役所職員、本人：無職
	居住地	奈井江	分からない	帯広		札内	分からない	A町	釧路	帯広	札幌	A町	釧路
	交流状況	年3回	なし	ある		あまりない	音信不通	よくある	時々	ある			時々
	備考	中学校は、特殊学級		本人：身体障害、妻：聴覚障害		元妻の連れ子	夫の姉の娘（19歳の時に家出）		旧・教護院入所経験あり				
第2子	続柄(年齢)	次男（46）	長女（58）	長女（71）		次男（42）		次女（50）		長女（53）	次女（49）	長女（52）	
	既婚・未婚	未婚	分からない	既婚		既婚		既婚		既婚	既婚	既婚	
	家族構成		分からない			夫婦・子1		夫婦・子2			夫婦・姑		
	学歴	中学校卒	中学校卒	高校卒		高校卒		中学校卒		高校卒	高校卒	高校卒	
	職業	障害者施設入所中	分からない	夫：農協　本人：無職		会社員		夫：自動車整備工場、本人：パート		夫：刑務官、本人：無職	夫：会社員、本人：パート	夫：農協　本人：老人ホーム	
	居住地	赤平	分からない	A町		嫁の実家		A町		帯広	帯広	A町	
	交流状況	年3回	なし	よくある		あまりない		たまに		時々			
	備考	中学校は、特殊学級				元妻の連れ子							
第3子	続柄(年齢)	三男（45）	次女（55）	次男（65）		三男（38）		長男（42）		次女（51）	長男（46）	次男（51）	
	既婚・未婚	既婚	分からない	既婚		分からない		既婚		既婚	既婚	既婚	
	家族構成	夫婦・子2	分からない			分からない		夫婦・子2					
	学歴	中学校卒	高校中退	中学校卒		専門学校卒		中学校卒		高校卒	大学卒	中学校卒	
	職業	無職	分からない	本人：問屋、妻：無職		建築関係		分からない		夫：農協、本人：無職	本人：会社員、妻：パート	鉄工所	
	居住地	歌志内	分からない	帯広		札幌		東京		新得	札幌	帯広	
	交流状況	なし	なし	ある		音信不通		なし					
	備考			退職している				嫁からたまに手紙がくる					
第4子	続柄(年齢)			三男				三女（40）		次男（49）			
	既婚・未婚			既婚				既婚		既婚			
	家族構成							夫婦・子3		夫婦			
	学歴			高校卒				高校卒		高校卒			
	職業			本人：校務（ボイラー）、妻：無職				夫：自動車整備工場、本人：パート		居酒屋経営			
	居住地			札内				音更		帯広			
	交流状況			よくある				たまに					
	備考												
第5子	続柄(年齢)			次女（死亡）	四男＊（死亡）								
	既婚・未婚			既婚	既婚								
	家族構成												
	学歴			高校卒	高校卒								
	職業			夫：道職員、本人：道職員	本人：セールス								
	居住地												
	交流状況												
	備考			死亡している	死亡している								

注）＊印のある事例3の第6子については、スペースの都合上、事例4のコラムの第5子欄に記載

		13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25
第１子	続柄(年齢)	長女（54）	長男（48）	長女（54）	長男	長男（47）	長男	長女（55）	長男（48）	長男（46）	長女（55）	長男（41）	長男（49）	長女（51）
	既婚・未婚	既婚	再婚	既婚		既婚	既婚	既婚	既婚	既婚	既婚（夫死別）	既婚	既婚	既婚
	家族構成	夫婦・子１・舅	夫婦のみ	夫婦・子４				夫婦・子３	夫婦・子２・舅	夫婦・子２	母子	夫婦・子２	夫婦・子３	夫婦・子３・舅姑
	学歴	高校卒	高校卒	高校卒		専門学校卒	中学校卒	短大卒	大学卒		高校卒	高校卒	高校卒	高校卒
	職業	夫：会社員、本人：ヘルパー	夫婦で自営業	夫婦で自営（新聞販売店）		本人：大工・町議員、妻：パート	本人：土木関係、妻：パート	夫：病気療養中、本人：老人ホーム	本人：住職、妻：無職		亡夫：会社役員、本人：無職	本人：自動車整備会社、妻：パート	本人：ブロック会社、妻：菓子屋（パート？）	夫：公務員、本人：無職
	居住地	Ａ町	Ａ町	Ａ町		池田	Ａ町	帯広	釧路町	帯広	帯広	帯広	札内	帯広
	交流状況	よくある	よくある	よくある			よくある	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある	よくある	ある
	備考		前妻との間に子３										子１は既に教員として独立。	
第２子	続柄(年齢)		長女（45）	次女（51）	長女		次男			長女（44）	長男（52）	次男（40）	次男(死亡)	次女（48）
	既婚・未婚		既婚	既婚			既婚			既婚	既婚	既婚	既婚	既婚
	家族構成		夫婦・子１	夫婦・子２						夫婦・子２・姑	夫婦・子３	夫婦・子１	夫婦・子１	夫婦・子２
	学歴		中学卒	高校卒			中学校卒				大学卒	高校卒	高校卒	高校卒
	職業		夫：会社員、本人：公文式の添削パート	夫婦で自営（米・玩具販売）			本人：楽器店、妻：看護婦			夫：北電	本人：教員、妻：介護福祉士	本人：団体職員、妻：パート	本人：警察、妻：ＪＡ共済	自営（パン屋）
	居住地		帯広	帯広			帯広			札幌	音更	Ａ町	静岡	清水
	交流状況		よくある	よくある			なし			よくある	よくある	よくある		ある
	備考												２年前（46歳）に死亡	
第３子	続柄(年齢)				次女		長女				次女（48）			長男（47）
	既婚・未婚						既婚				未婚			既婚
	家族構成										単身			夫婦・子１
	学歴						中学校卒				高校卒			大学卒
	職業						夫：左官、本人：パート				化粧品会社管理職			自営（広告業）
	居住地						札内				札幌			愛知県
	交流状況						よくある				よくある			ある
	備考													
第４子	続柄(年齢)						次女							
	既婚・未婚						既婚							
	家族構成													
	学歴						中学校卒							
	職業						分からない							
	居住地						音更							
	交流状況						あまりない							
	備考													
第５子	続柄(年齢)													
	既婚・未婚													
	家族構成													
	学歴													
	職業													
	居住地													
	交流状況													
	備考													

たためである。貧困研究において一般に「貧困」は、ある一定の所得水準によって定義付けられる。つまり、所得水準の評価が絶対的であるか相対的であるかはともかくとして、「貧困＝低い所得」であるというわけだ。

この小論がそうであったように、確かに「貧困の世代的再生産」の視点からも、「不利」の一つとして世帯の低所得にはこだわっているが、それだけではなく、不安定な就業状態、不健康、低学歴、相対的に不利なネットワーク・社会関係などにも注目している。「貧困の世代的再生産」という視点からは、これらを、現在の生活のあり方、将来の生活、次世代の生活に関わる条件とみている。このことは、いわば高い階級（ブルジョア階級、ミドルクラス）に対して低い階級（労働者・庶民・貧民階級）を特徴付ける諸条件に着目しているということであり、社会学における、たとえばP.ブルデューなどによる社会階級分析の視点に似ている。であれば、「社会階級の再生産」の視点と言い換えることもできるのかもしれない。しかし、あえて「貧困の世代的再生産」と呼ぶにはそれなりの含みがあると思われる。というのは、「社会階級の再生産」と同じだとすれば、先にあげた諸条件において相対的に不利な状態にあることを「貧困」とすることになるが、「低い階級」を「貧困」という言葉でおきかえる意味はとりたててないからである。素直に社会階級分析の視点であると呼べばよかろう。にもかかわらず「貧困の世代的再生産」と呼ぶとすれば、階級的な諸条件とは「貧困」な生活やその世代的な継承に関わる変数であって「貧困」そのものを表現するものではないと考えることになる。

では、世代的に再生産される「貧困」とは何か。A町調査の結果の整理しつつ、あらためてこの疑問に答える必要性を感じていた。ここで、明確な答えを出せるなどとは思っていないが、少なくともいえることは、「貧困の世代的再生産」の視点は、社会における層・集団・グループとしての低い階級というより、むしろそうした集団のなかにおかれた、それぞれの家族、より正確にいえば個人に焦点を当てているという特徴を持っていることである。それが階級間の関係性を明らかにすることを基本的な課題とする社会階級分析の視点と袂を分かつポイントとなっている。これは、基本的に貧困「層」を問題としてきた従来の貧困研究との相違点でもある。結局、「貧困の世代的再生産」の視点とは、低所得も含む階級的な諸条件（不利）を背負わされた多様な個人や家族の生活を問題にするという特徴を持っているわけであるが、何を「貧困」としているのか（換言すれば研究視点の独自性）について、貧困研究などとの位置関係も含め適切な答えはまだみあたらない。

注

1）この論考は、佐々木が全文を執筆している。名前をあげたその他の者は、調査員としてA町調査に参加し、表1～表4の基礎となる調査データのとりまとめを担当した。

2）ここで掲載している高齢者の「語り」は、録音ではなく調査員によるメモを出所としているため、語感は事例によって異なる。また括弧内は佐々木による補足である。

3）「累積的有利・不利」は、Stephen Crystal と Dennis Shea から借りた概念である。Crystal らは、この分析概念を使って高齢期に至るまでのライフコースにおける収入や資産など経済的な有利・不利の形成を論じている。彼らの分析概念については、1990年の論文を参照した［Crystal and Shea 1990 : 437-438］。

文献

青木紀ほか(2004)「調査ノート：高齢者一人暮らし世帯の貧困―貧困の世代的再生産の視点から―」『教育福祉研究』10(2)　1-15頁。

Crystal, S and Shes. D(1990) Cumulative Advantage, Cumulative Disadvantage, and Inequality Among Elderly people, *The Gerontologist*, Vol 30, No.4, pp437-443.

（北海道大学教育学研究科・助手）
（北海道大学教育学部3年）